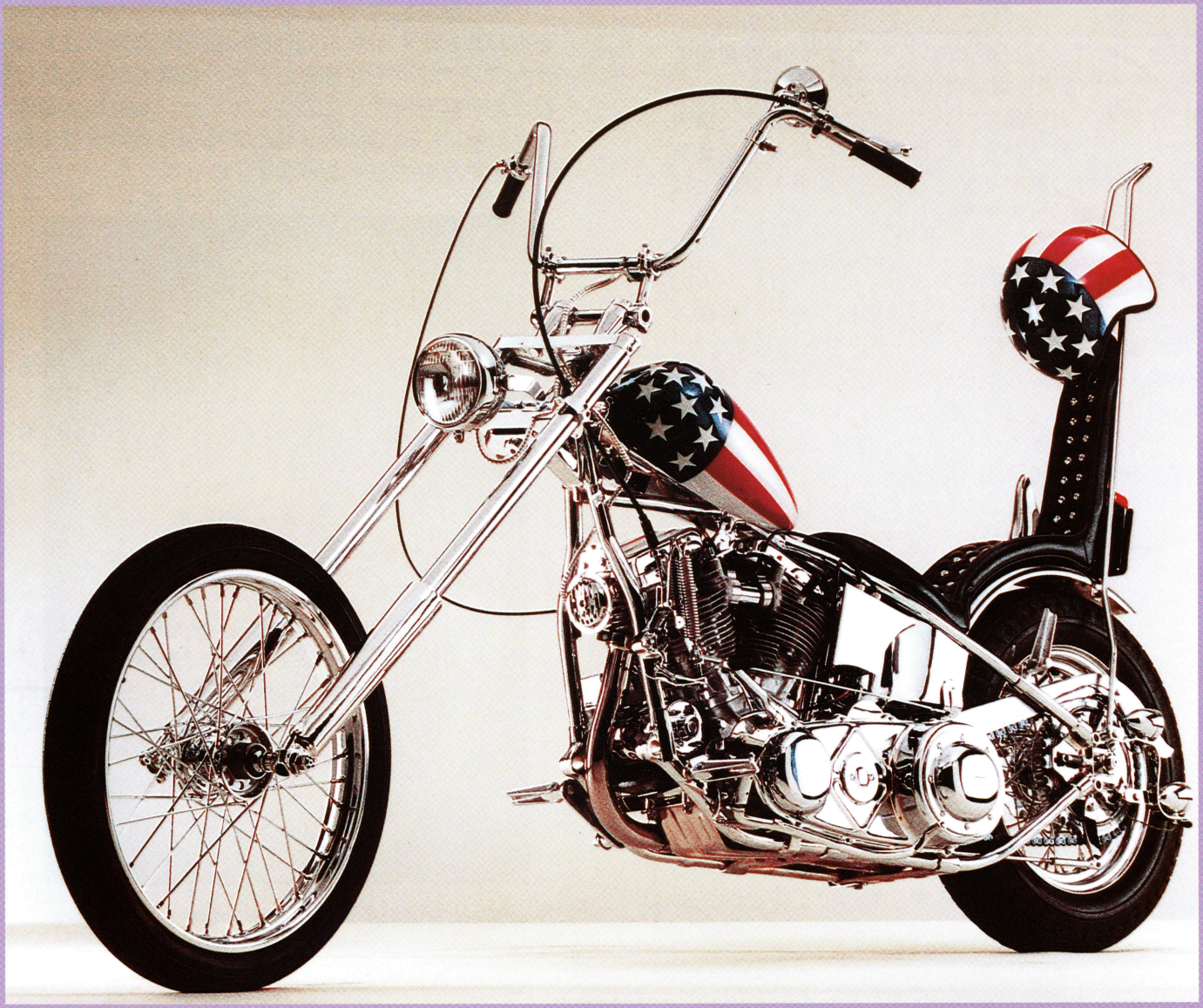
空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART 愛知県美術館友の会　会報　MEMBERSHIP 第11号



ハーレー・ダヴィッドソン社《イージー・ライダー・チョッパー》1969年（1993年再制作）グッゲンハイム美術館蔵

目次

- **会員からの提言**　私の美術館　林葉子　・・・・・・・・・・・2
- **美術館訪問**　三岸節子記念美術館　宇都宮多佳子　・・・・・4
- **ただいま準備中**「アメリカン・ドリームの世紀」展　・・・・5
- **平成12年度アンケート集計報告**　・・・・・・・・・・・・・・6
- **事務局からのお知らせ・編集スタッフから**　・・・・・・・・8

会員からの提言

美術館の魅力

林　葉子

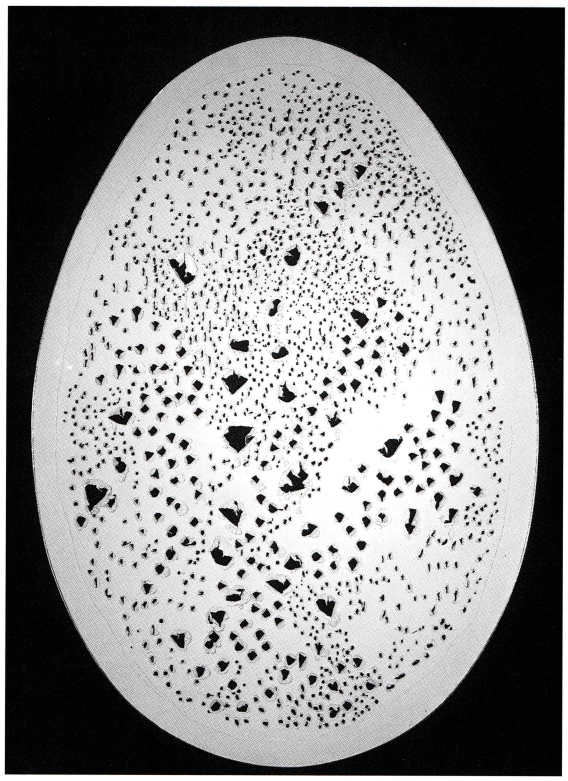
あなたは何を求めて美術館に足を運びますか。海外の有名美術館所蔵の名画を実際に自分の目で確かめるため？または自分の好きなアーティストの作風が年代とともにどう変化していったかを味わうため？私も以前はこのような楽しみのために美術館にでかけていました。でもこの数年の間に少しずつ変わってきたように思います。

ひとつには、名古屋市内のいくつかの画廊を覗くようになり、多種多様の現代作家の作品に出会い、実際に作家本人と作品についていろいろお話する機会を得たこと。もうひとつには友の会に入って鑑賞会で学芸員の方の説明を聞きながら企画展を普段とはひと味違う楽しみ方を体験したことです。

前者に関しては、勤務先の近くに１ヶ月に一人の作家の個展をずっと続けている画廊があり、昼休みに時々覗いているうちに、オーナーとも親しくなり、作家論・作品論から現代の美術状況までいろいろ語り合うようになりました。たまにはオープニングパーティーにも顔を出し、この地方の美術関係者・美術愛好家の話を小耳にはさむこともありました。無名の作家の中には数年後に世界に羽ばたいて活躍するようになる人もあり、こういう作家を掘り出す画廊主の目の確かさに感心したこともあります。また真摯に妥協せず自分の作風を確立している作家の生き方に共鳴して作品を購入する楽しみも覚えました。但し経済的制約・物理的スペースの問題で気に入ってもなかなか買えませんが。

後者に関しては、実際に参加された方ならおわかりでしょうが、１時間担当学芸員の講義を聞いたあと、閉館後の美術館で館長・副館長も含めた学芸員と一緒に自由に企画展を堪能することができます。そこでは作品解説のみならず、展示の工夫とか企画展を開くまでの苦労話や美術館運営の大変さなどの裏話を聞くことができます。鑑賞会に参加する度に愛知県美術館が身近に感じられるようになるのは私だけでしょうか。

私が友の会に入会したのは、「イタリア美術 1945-1995 見えるものと見えないもの」という企画展がきっかけです。「アルテポーヴェラ」をキーワードに26名の作家の多種多様な作品が展示されていました。ルーチョ・フォンターナ、ピエロ・マンゾーニ、ヤニス・クネリス以外はほとんど聞いたことのない作家でしたが、絵画、彫刻、インスタレーションなどジャンルを超えた作品群が並んでいてとても興味を持ちました。もう一度見たいと思った時偶然友の会のパンフレットが目にとまり、招待券がいただけることが魅力ですぐに入会しました。興味のある企画展では、一度では十分味わえないため二度三度出かけたくなることがあります。



ルーチョ・フォンターナ
《空間概念、神の終焉》
1964年
東京都現代美術館蔵

たまたま、この後上京する機会があり、東京都現代美術館で開催されていた同じ企画展を見ました。この美術館は吹き抜けがあるため階下に展示されている作品を見下ろすことができます。このことにより、新しい発見をすることがあります。例えば壁面に垂直にとりつけられたオートバイの作品があったのですが、その後ろに蛍光管で示された数字がフィボナッチ級数になっていることに気付き、オートバイが実際に走る加速を感じることができました（蛇足ですが数学に興味のある方はこの級数と黄金分割の関係について考えてみてください）。これをきっかけに、場の違いにより作品の雰囲気が変わってくることに気が付き、作品の空間配置にも関心をもつようになりました。

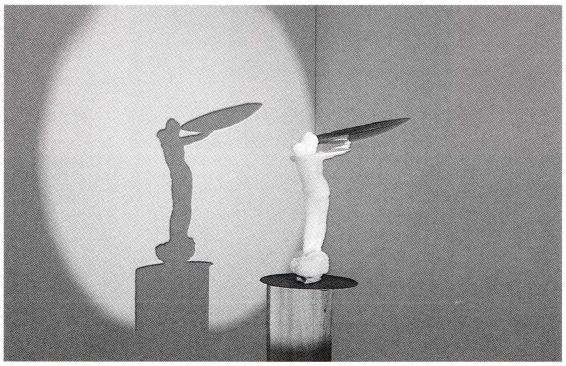
さて、美術館の魅力を決める要素としてどんなモノがあるでしょうか。建築物としての美しさ、所蔵品の質と量、企画展・常設展の内容とサービスなど。では「我が愛知県美術館」が持つ他の美術館にはない魅力とは何でしょうか？

92年秋新装オープンしてから99年度まで７年半の間に45の企画展が開かれています（この中であなたの記憶に残っているのは何でしょうか）。入場者数ベスト３は「セザンヌ展」「アンドリュー・ワイエス展」「パウル・クレーの芸術」。逆に少ないのは「戸張孤雁と大正期の彫刻」「危機の時代と絵画」。来館者の数で企画展の質を決めるのは野暮ですが、折角学芸員の努力で実現した余り目立たない地味な企画展に一般の関心を集めるには何か工夫が必要でしょう。ポスターなどによる宣伝、鑑賞の手引きとなる講演会もそれなりの効果はありますが、根本的にはもっと気軽に訪れることのできる雰囲気作りと、美術に興味を示す観客層を広げることが大切ではないでしょうか。

また愛知県美術館には寄贈品も含めて約3,300点の所蔵品があるそうです。これまで年５、６回の展示替えがあり、「きわめて多様な展開を示した20世紀の美術をできるだけ幅広くまた体系的に紹介する」という視点で、いくつかのジャンルに分けてコレクションが展示されています。時に展示室６でテーマ展が企画されることもありますが、わざわざ所蔵作品展のみを見にでかける程の魅力は少ないように思います。

愛知県美術館の特長は、巨大な吹き抜けを含む豊かな空間を持つ芸術文化センターの中に設置されていることでしょう。オペラ公演もできる立派な大劇場、パイプオルガンもある音響のよいコンサートホール、多様な舞台設置ができる小ホールなど。各施設を訪れる観客や聴衆が美術館にも興味を持ち、芸術を総合的に楽しめるような企画が増えていくとよいのですが。

ところで、私は美術をより深く味わうために友の会に入ったのですが、最近この会の事業として「美術館活動の支援」という項目があることを知りました。県の厳しい財政難の影響で美術館の予算（運営費・購入費）が大幅に削減されたため、企画展の運営やコレクションの充足に支障を来していることに対して、友の会として何ができるか考えることが必要です。美術館側のサービスを享受するだけでなく、美術館の活動をどういう形でサポートできるか、会員ひとり一人が自分の問題として、叡智を出してくださることを期待します。



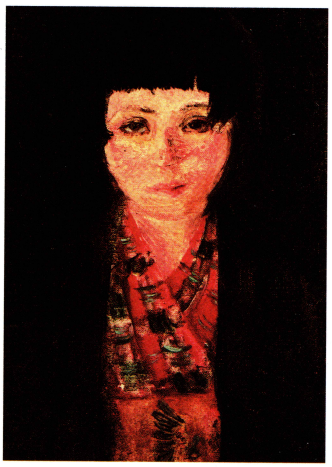
マルコ・パニョーリ
《射手の姿のように（空間と時間）》
1992-93年
作家蔵

私の行った美術館

尾西市三岸節子記念美術館

宇都宮　多佳子

三岸節子画伯は、愛知県中島郡起町で織物工場を経営する父・吉田永三郎、母・菊の６番目の子として生まれました。美術館はその生家の跡地に建てられています。大通りから道一本入ったところに、しずかに美しく建っていました。建物の入口には水が涼しげに流れ、ガラス張りの通路を渡ってすぐ左手にエントランスホールがあり、煉瓦造りの壁やずらりと並んだ間接照明が柔らかく気持ちのいい空間を作っています。展示室にも節子画伯が大好きだった光がふんだんに使われ、床や天井に使われている木のぬくもりが気持ちを和らげてくれます。織物工場をイメージした鋸屋根、ヴェネチアをイメージした水路など節子画伯の思い出と深く係わった美術館です。



三岸節子《自画像》1925年
尾西市三岸節子記念美術館蔵

節子画伯は渡欧をきっかけに、室内で静物を描くのではなく、風景に題材を求めていきます。２度目の渡欧は1968年。息子黄太郎と南フランスのカーニュに移り住み、イタリアやスペインを車で旅行し、作品の題材を探して歩きました。特にヴェネチアが好きでたびたび訪れています。ヨーロッパの石の文化、カーニュの赤い屋根、鮮やかなミモザ、黄金色の麦畑、ヴェネチアの煉瓦の家々、スペインの白い壁……。数多くのデッサンを基に作品は描かれています。風景からの印象を覚えるために写生をし、自由に絵を描いていくのが節子画伯流とのこと。そのためでしょうか、どこか抽象的でありながら複雑ではない、美しく力強い絵がとても印象的でした。

さて、尾西市三岸節子記念美術館では、年２回の特別企画展を行っています。今後は、節子画伯と親交の深かった画家や尾西市近辺出身の画家を主に企画していく予定だそうです。次回は、「鳥海青児・三岸好太郎・三岸節子」展（2000年10月20日～12月10日）です。同じ春陽会から出発し、親交の深かった３人。日本の洋画界に個性的な足跡を残した彼らにスポットを当てます。節子画伯と好太郎、鳥海青児との関係や彼らから受けた影響はどんなものだったのでしょうか？

三岸節子記念美術館には、二人の学芸員がおいでです。お二人には展覧会の準備の他にも展示室の空調、天井部の自然採光の調節など、日々の仕事が山のようにあります。展覧会案内など定期的な郵送物の準備もします。三岸節子記念美術館でも美術館友の会の設立構想があるそうです。友の会を通じてより多くの方に美術館にきていただきたい、美術館をより活用していただきたい、そういう希望があるそうです。

お話をうかがいながら、ふと私たちの愛知県美術館友の会のことを考えていました。

美術館データ

開館時間：　ＡＭ９：００～ＰＭ５：００
　　入館はＰＭ４：３０まで
休 館 日：　毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
観覧料金：　常設展　一　　般　３２０円
　　高・大学生　２１０円
　　小・中学生　１１０円
交　　通：　ＪＲ尾張一宮駅・名鉄新一宮駅下車、
　　名鉄バス「起」行約12分
　　起工業高校前下車徒歩１分
電　　話：　0586-63-2892

ただいま準備中
「アメリカン・ドリームの世紀」展

11月23日より「アメリカン・ドリームの世紀」展が開催されます。これに先立って、この企画展について雪山副館長にお話を伺いました。

――この展覧会を計画された目的は?

もうすぐで21世紀を迎えます。20世紀は「アメリカの世紀」とも呼ばれますが、それはアメリカが政治的・経済的に世界を制覇したということに止まりません。大量生産・大量消費に根ざした「大衆社会」の出現、マスメディアの急速な発展、これらの要素から生まれたアメリカの新しい文化とライフスタイルは、20世紀後半の世界の文化を大きく方向づけたと言えます。皆さんもご存知のように、この文化とライフスタイルは戦後の日本社会に絶大な影響を与えました。今日の私たちの生活も、多くはその延長上にあると言ってよいでしょう。そこで、この世紀の変わり目に際して、アメリカに生まれ、日本、そして全世界に波及したこの新しい文化を、美術、デザイン、映画、写真、音楽など、さまざまな分野から捉え直してみよう、それも、日本人の視点から振り返ってみよう、というのが今回の企画です。

――見所は?

どの世代にもそれぞれ楽しんでもらえる要素を盛り込んでいます。ややご年配の方はマリリン・モンローやエルビス・プレスリーに郷愁を感じられるかもしれません。若い世代の人の中にはマッキントッシュのコンピューターのデザインの変遷に興味を持たれる方もいらっしゃるでしょう。とにかく、あのピカピカに輝いて見えたアメリカを象徴するようなものは、何でも展示します。アンディ・ウォーホルやリキテンスタインのポップアート、「ウェストサイド・ストーリー」などの映画のポスター、大量生産・大量消費時代の先駆となったT型フォード、テレビのホームドラマを見て日本人があこがれた家庭電機製品、たとえば大きなハムが鎮座していた、その頃の日本人には巨大に見えた冷蔵庫とか。また、どこか都会の寂しさを感じさせるエドワード・ホッパーの絵画や古いネオンサイン、ジュークボックスなども展示します。

ちょっと変ったところでは、コカ・コーラの自販機なんかも出品されますよ。コカ・コーラはアメリカ文化の一つの象徴という見方に立って、展示室の一部に特設コーナーを設け、コカ・コーラのあの独特のかたちをした瓶の変遷や、コカ・コーラを題材にした作品をいろいろお見せするつもりです。

――雪山さんの一番のお勧めは?

映画「イージーライダー」(1969年、日本での公開は70年)でデニス・ホッパーが乗ったチョッパー型のハーレー・ダヴィッドソンのオートバイ。映画をごらんになった方は覚えていらっしゃると思いますが、本物は最後に銃で撃たれて壊れてしまう。この展覧会には、その完全なレプリカが出品されます。私はオートバイには乗りませんが、この映画に共感した世代なので。いわば、ノスタルジーです。

――雪山さんご自身の趣味についてお聞かせ下さい。

ウッフフ。お酒を飲むこと。昼休みにCD屋と本屋をのぞくこと。スポーツはほとんどしません。それでも毎年1度はスキーに行きます。これも半分はお酒が目当てですが。カミさんとのお付き合いで夏山に少し。それから、これは趣味とは言えないかもしれないけれど、お洗濯。心が洗われるような気になります。

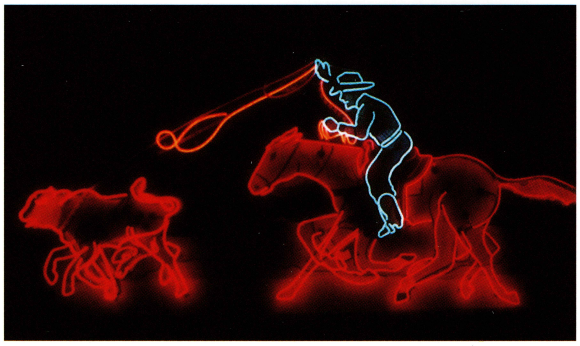
――友の会会員にメッセージをお願いします。

当美術館は皆さんもご存知のとおり、これまではオーソドックスな内容の展覧会を開催してきました。これについては多くの方々から相当高い評価を得ているのではないでしょうか。今回このような少々型破りな展覧会を行なうことは、美術館として更に成長する為のチャレンジだと思っています。これを機に、これまでの美術ファンに加えて、さらに多くの方々が美術館へ足を運んで頂けたらと願っています。皆さん今後とも愛知県美術館を応援して下さい。

――お忙しい中、有り難うございました。

(聞き手:水野)

アメリカン・ドリームの世紀
11月23日(木)～2001年1月28日(日)
11月30日(木) 友の会会員鑑賞会
是非、お誘い合わせのうえご来館下さい。



《Cawboy/Bar Sign》
ネオンサイン 1940年代後半 中子真治氏蔵

平成12年度アンケート集計報告

先に行いました平成１２年度友の会アンケートの集計結果を報告します。

今回のアンケートには２０８名の方から回答をいただきました。回答率は４８．６％（＝２０８÷４２８）でした。アンケートの中で様々な提案、意見をいただきました。これからの友の会活動の参考にさせていただきます。

１．会員数の推移

・会員数は昨年から４７名増えました。内訳は男性が１９４名、女性が２３３名、そして１団体、合計４２８名です。

・入会理由で目を引いたのが、同じ趣味の友人を見つけたい、美術の好きなもの同士でいろいろな話をしたい、というものでした。

・美術館友の会では、企画展ごとに鑑賞会を開催しています。また、年に数回、コンサートなどを企画しています。この機会にぜひ参加して、仲間を見つけてください。

その他の入会理由として、

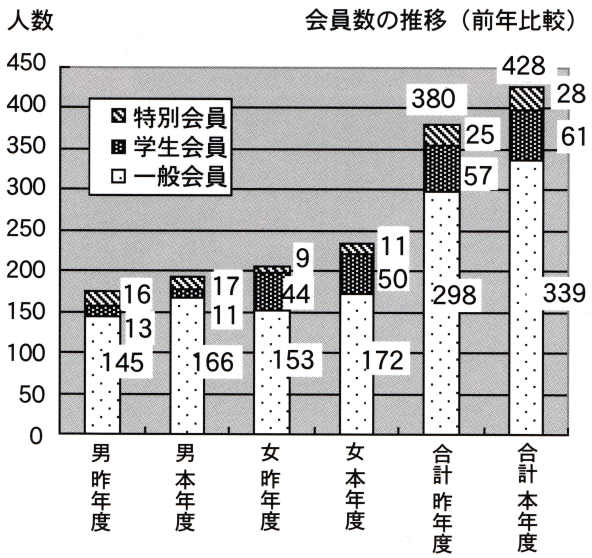
a.　美術が好きだから

b.　自分も絵を描くから

c.　入場券がもらえるから

d.　館内のショップで割引があるから

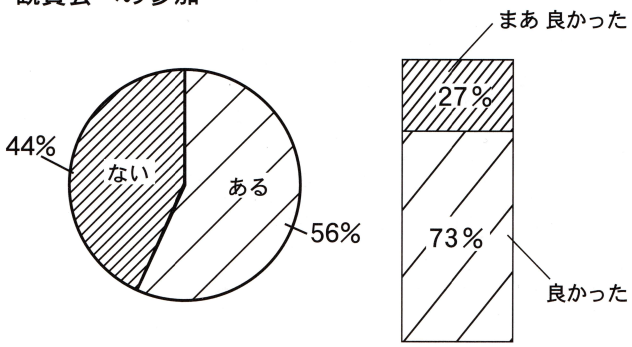
などがあがっていました。



２．友の会の催しに参加しますか？

・友の会の催しへ参加したことがある方の満足度はかなり高いようです。会員の方の中には、これが楽しみで友の会に入会された方もいます。以下で、それぞれの催しについて簡単に紹介します。

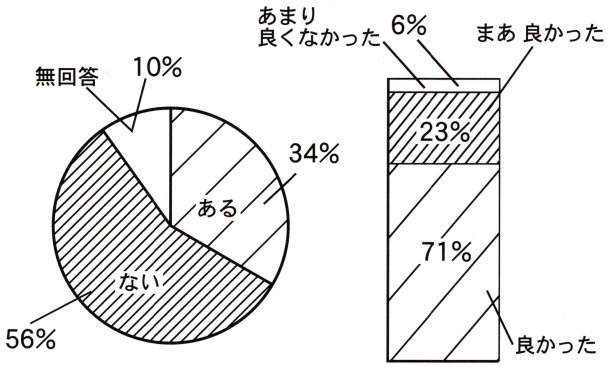
観賞会への参加



・鑑賞会は、各企画展ごとに美術館の閉館後に友の会のメンバーだけで作品鑑賞をするものです。

・鑑賞会には、展覧会担当者を含め多くの学芸員に参加していただいています。

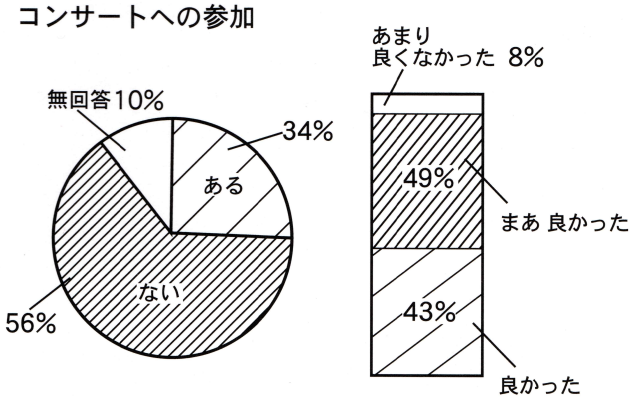
懇親会への参加



・懇親会は、会員相互の親睦のために開かれます。雰囲気もかなりくだけた感じです。

・若い方にも参加して欲しいと思います。

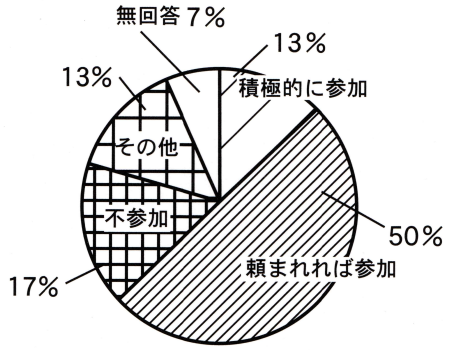
コンサートへの参加



・コンサートはそのときの企画展の内容に合わせて、通常のコンサートよりも気楽に楽しめるプログラムを用意しています。
・先回は美術館のロビーを会場に、演奏者から曲の生まれた背景や楽しみ方をお話いただきながら聴かせていただきました。
・また、チェンバロの演奏会の際には楽器製作者から製作にまつわるエピソードや現代楽器と古典楽器との違いを解説していただいたこともありました。

3．ボランティアに参加していただけますか？

ボランティアへの参加意欲



・「積極的に参加」とご回答くださった方には事務局から連絡させていただきました。また、9月下旬にボランティア・スタッフ募集のお知らせを会員の皆様に送付させていただきましたところ、続々とお返事をいただいており、ボランティア活動もより具体的に進めていくことができそうです。

集計報告あとがき

「パートナーシップ」
愛知県美術館友の会のアンケートに多数のご意見・ご指摘をいただきありがとうございました。内容から皆様が美術に限らず芸術全般に広く期待と理解をもたれていることがうかがわれました。と同時にその期待と理解にはずいぶんと個人差があることにも気づきました。

友の会の活動目的は大きく分けて２つあります。ひとつは愛知県美術館の活動を支援し、その普及を図ること。もうひとつは会員の美術に関する教養を高め、美術文化の向上を図ることです。これは美術館あるいは友の会のどちらかが一方的にサービスを提供するということではありません。お互いに相手を補完しあうことを目的としています。たとえば、ご要望の多かった音声ガイドや駐車場利用の割引にしても、ただ会員へのサービス向上ということではなく、美術館や芸術文化センターを利用する一般の方も含めてより良い利便性を提供するためのアイデアとして美術館側と検討の場をもちたいと思います。現時点で割引を受けられる館内ショップの一覧は先の速報で会員の皆さんにお知らせしたとおりです。あわせて割引優待の表示もわかりやすくしました。また近隣の美術館の状況に目を向ければ、美術館をただ利用する段階から様々なかたちで活用・協力する段階へと変化が見られます。ボランティアによるギャラリートーク、各種ワークショップでのアシスタント、展覧会案内など郵送物の発送作業への取り組みなど友の会と美術館とのパートナーシップの事例はいろいろあります。

先日、ある陶芸作家とお話しをする機会がありました。その作家は「作品というものは経験によるところがあって多くはこれまでの作品の延長上で作るのだけれど、まったく新しい環境、新しい材料で制作してみたいと思うときがある」とおっしゃっていました。そして「その新しさ、異質さの中であれこれと試行錯誤しながらも自分なりに手ごたえのあるものを作れそうだなという漠然とした思いがある。」ともおっしゃっていました。この作家の中で何かが変化し始める前兆に思えて印象的でした。

私たちの愛知県美術館友の会も設立されて６年目になります。企画展鑑賞会やコンサートなどの催しも定着してきました。今回のアンケートをきっかけに、友の会と美術館とのパートナーシップをさらに深めるにはどうしたらいいか、皆様にも考えていただきたいと思います。（杉山）

事務局からのお知らせ

この会報は本来愛知県美術館友の会の会報ですが、芸術文化センター・美術館へ来られる一般の方にも無償配布していますので、友の会の活動と愛知県美術館との関係について、この場を借りて一般の方々にもご説明をさせて頂きたいと思います。

友の会は美術愛好家の集まりです。絵に惹かれ、企画展や所蔵作品展そして講演会に出席して、もっと深く知りたいと思って友の会に入会して下さる方が多いと思います。

友の会に入って下さると、「特別鑑賞会」という企画展ごとの解説・鑑賞会があって、会員だけが、学芸員によるレクチャーを1時間くらい受けて、その後企画展会場を貸し切って館長・副館長はじめ学芸員の方々と作品の前で言葉を交わしたり説明を直接受けることができます。この「特別鑑賞会」は友の会に入った方々には大変評判が良く、愛知県美術館および当友の会の貴重な財産となっています。

次に、友の会会報についてご説明します。この友の会の会報「空中回廊」は、美術館と友の会会員、そして会員同士を結びつける絆として機能し、年2回発行されています。原稿の締め切りの頃には、編集スタッフが美術館11階へ集まって打合せたり、情報のやりとりをしてまとめ、編集が進んでいきます。

企画展は年に5回位行われますが、それに向けて関連ポスター・カタログ・招待券などの一式資料の会員への配布が行われます。今年はアンケートの集計・レポート（速報）化などの作業が加わり、さらに８～９月はこの会報の原稿作成・編集が重なって、ボランティアスタッフの方々は大活躍でした。

ボランティアスタッフには、主に会報編集に携わる方々と、受付や封筒詰め・パーティーのお手伝いなどを随時お願いするケースなどがあります。

今、美術館は財政的にピンチです。美術館活動の支援…ということが如何に大切かということを痛感しています。美術館のピンチは同時に私達の問題でもあります。会員増によって、展覧会・講演会の後援やボランティア活動によって、篤志家による寄付によってなど、段々と支援が結実しつつあります。

有難いことに、友の会の会員は昨年・本年と漸増しています。このことは美術館と友の会にとって大変大きな励みとなっています。今入会して下さると、半年分の会費で入会でき来年の３月迄有効です。是非、ご入会下さい。（平野）

編集スタッフから

今春、友の会に入会した新米会員です。この８月から編集スタッフとして参加させて頂くことになりました。

今回、初仕事として雪山副館長インタビューを担当しました。かなり緊張しましたが、大変楽しく興味深いお話を伺うことができました。その雰囲気が会報を読まれた皆さんにも伝われば、と願っています。まだまだ分からないことばかりですが、親しみと読み応えのある会報にしてゆきたいと思っています。（水野）

第11号をお届けします。今回は、「アメリカン・ドリームの世紀」とアンケート報告を中心に構成しました。取材でいろいろなお話をうかがっていて思ったことは、観客として外から見る美術館と実際のそれとはかなり違うということでした。特にその台所事情は相当に厳しく、来年以降の展覧会がなくなったりしないか心配です。（杉山）

編　　集　宮崎 玲子／杉山 博之／中野 ともみ
水野 愛子／森 健次／安井 智子
編集協力　愛知県美術館企画普及課

発　　行　2000年11月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
愛知県美術館内
TEL 052-971-5511（代表）　内線347
FAX 052-971-5604
e-mail : tomonokai@aac.pref.aichi.jp

デザイン／レイアウト　小島 篤／鈴木 彩子